

# 観光国土づくり

—新しい日本の観光のために—

横浜市企画調整局長

田村 明

## 1. 自然と人間

私のように大都会に生れ、大都会に育ち生活してきた者にとって、都会にない大自然の魅力は何物にも代え難いものがある。屹立したマッターホルンの頂きや、モンテローザの輝くばかりの大氷河を見ていると、一口中でも飽きることがない。ナイアガラの瀑布も壯観である。そればかりでなく、何の変哲もないどこまでも続くロシアの平原のタイガ（密林）も単調ではあるが厳しい大自然を感じさせるし、ノールウエーのフィヨルドやコロラドの大溪谷など大自然の不思議やすばらしさは限りなく存在している。

しかし、自然の美しさは何も外国ばかりではない。我国の自然もスケールの大きさでは及ばないかもしれないが、その代り変化に富み、キメが細かく、あらゆる要素に恵まれ魅力に富んでいる。大きさや質の相異はあるにしても、一流の外国の景観に決してひけをとらない。ニース、モナコ、カンヌと続くコートダジュールの海岸線にしても、伊豆をはじめ日本には沢山ある海岸ぞいの風景に比べて、自然がとくに差があるとは思えない。むしろ大洋に面し長い海岸線を有する我国の海岸線の方が美しいかもしれない。

それなのに、外国と日本には何かちがうものがある。それは外国という物珍しさだけではない。自然

そのものの相違というよりは、自然に人間の手が加わったときの相違である。ヨーロッパでは自然に人間の手が加われば加わるほど美しくなるという。事実、ヨーロッパの荒々しい自然の多くは、一部の大自然を除いてほとんど人の手によって長年の間に改変され、親しみやすいなじみのある農村や牧場や森に変えられている。アルプスの大きな破風の美しい木造の民家は、その大自然とよく調和しているし、アルプスの風景の典型のようにいわれる緑の濃い牧場も、木々も、人々の手で美しく作られ管理され、育まれている。人々の手が加わることによって、風土は特徴ある魅力を増し、自然はいつそう味わいのあるハーモニーをかなでることになる。ところが我国の場合は残念ながら人の手が加わることによって不協和音を生じてくることが多いのである。

我々は自然を訪れるときに、自然にそのままじかに触れることは困難である。そこで最低限でも山に登山道を開き、山小屋を建てる。さらにもう少し多くの人々が訪れるためには、ケーブルカーやロープウェイ、そして自動車道が開かれ、ホテルやレストランが建てられることになる。自然が人間社会と絶縁してばかりはいられない以上、このように人工的な手が加えられてゆくことも、場所によっては必然であろう。ただしその際に、自然と、手を加えた人工物との調和と、そしてひとつの新しい環境を創り

あげてゆくという意識と技術が必要なのである。

我国では自然はあまりにも豊富に存在していたし、もともとそう荒々しいものではなく親しみやすい穏かなものであった。それだけにかえて自然と人間との間に新しい関係を築きあげようという努力があまり必要ではなかった。もちろん、日本の水田や山林にしても自然に手を加えてはいるが、人工と自然を対比共存さすのではなく、自然になじませながら、人工的加工はできるだけ少なくするやり方である。我国の人工物は自然と対立するものではなく、なじませとけこませるものであった。山中の庵は四周を囲むでもなく、草屋根をおき、自然のままの一部になって生活することができた。

これに対してヨーロッパでは荒々しい自然と闘い、これから身を守るために、建物には煉瓦や石を使い、木造にしても頑丈で自然と遮断するものである。それがかえて人工物と自然の明かな相違を認めつつ、よい共存を図るために気もつかい、自然と人工物との両者をコントロールして調和ある共存をさせることになったのである。

この相違は都市ではいっそう明白である。ヨーロッパや中国では、都市は城壁にかこまれた、自然から完全に人工的に切りとった存在だし、これまでの日本の都市は、人工物がなんとなく自然の中にちらばり、拡がっているだけではっきりした境界がない。

ところが、我国でも自然と人間がのんびり共存することが難しくなってきた。江戸時代末に比べてすでに人口は4倍になり、1人当たり消費エネルギーでは数百倍にも達する状態では、自然をより高度に活用せざるを得なくなってしまうからである。

しかし、初めから自然と人工とは異なるものながら、そこによりよい共存を求めて努力してきた歴史を持っていないため、なんとなく気軽に共存が可能であった時代の考えをそのまま適用してしまったことに悲劇があった。もし人口密度も少なく、また低

い経済水準にとどまるなら、従来のような自然との無意識的共存ができたであろうし、それは自然と人間の望ましい関係であったといえる。ただし現在の日本の状態を維持してゆくためにはそうはゆかない。いやでも自然と人工との対立を認め、その上でよりよい共存と調和を求めなくてはならないのである。

そのようなきびしい認識の上に一度立たないで、漫然と自然に手を加えていった日本の状態は、結局、人の手が加われば加わるほど、自然も人工物もともに不協和音を発するようになってしまったのである。我々はまだ本当に自然を冷静に客観的に見て、そこに我々の行なうべきことを考えてはいなかったのである。

## 2. 都市と人間

自然もよいが、外国の町を歩くのもまた楽しいものである。古い寺院や、宮殿、広場、公園もよいが、何となく人の集っている雑踏を歩いて、変わった店をみつけてみたり、石畳の道をこつこつと歩いたり、屋台の食べものをたべながら、子供の遊んでいるのや、大道の物売り、歩いている人々を見ているのも楽しい。町はたんなる建物や公園ではなく、そこに生活がある。その生きている有様がひとつの環境を構成し、珍しくもまた心たのしいのである。

しかし、人工と自然の間でさえうまくゆかないのなら、都市という矛盾する意思を持って行動する人と人の関係が集中的に存在しているところでは、不協和音が一層激しく現われる。都市づくりとなれば、これは無意識的に放っておいて各自が勝手ばらばらで成立つはずがないのである。都市とは、物と物の関係であるより以前に、人と人との関係である。都市はまず市民と市民という関係に互に認めあったルールを確立することから始まる。自由意志を持った個人同士は、互に矛盾対立する関係にある。しかし、より自由になり、またより共用の便益を図りたいた

めに、各自勝手な行動を互に規制しあってルールが生れるのである。

市民都市の育たなかった我国では、封建領主や中央官庁からの「お上」の命令の形でルールが示され、その強権によって調和を維持してきた。ところが、「お上」の力が薄れてきたとき、何となく自然と調和が保たれていた関係が薄らいだのと同様に、極端な対立と不協和が生じてしまうのである。もともと都市は放っておけば市民相互の矛盾と対立が存在する。だからこそ市民によってそれを意志によって調和させなければならないのである。

このような問題は観光地や観光都市では一層深刻な問題となって現れる。観光地は、ほとんどの場合は自然に恵まれ、自然を観光資源にしているから、自然——人工の調和関係がまず重要である。それと、同時に、観光地はひとつの都市や町を形成するのだから人工——人工の調和もまた極めて重要である。ところが、都市にはもともと本来の市民が育っていないし、その上観光地では、その都市や町に居住しない人々を対象として迎え入れることを目的としているのだから、一般の都市以上に二重にも三重にも難しい問題をかかえることになるのである。観光地づくりは我々にとって最も苦手のもののひとつと言えるかもしれない。

### 3. 現代の観光

観光の重点は、戦後だけを見ても著しく変容してきた。私も観光行政にタッチしていた戦後まもないころは専ら「国際観光」が重視された。国際観光とは、輸出物質のとぼしい我国では、その補完として、外客を誘致して外貨を獲得することであった。このため、観光地づくりは、外客を収容できるホテルや旅館、そして交通機関の整備に重点が向けられた。

次の高度成長の時期に入ると、ようやく、外客だけでなく、国民の側にも観光の需要が高まってきた。所得の向上と交通機関の発達で、国民の活躍範

囲を広げ、「大衆観光」とか「社会観光」とか言われるようになってきた。一方、この時代の国土の工業開発ブームに乗りおくれた地域が、地域開発の一種として、観光開発に目を向け、またこれらの背景に成長した観光資本が開発をすすめることになる。

さらに昭和40年代に入ると、「観光」という用語だけでなく、もっと広く、レクリエーション、レジャーから、さらには生きがい問題や、文化問題にまで発展してくる。1970年万博は、そのひとつの頂点であり、転機である。ここに予想をはるかにこえて集った6,000万人の人々の行動を何というべきか、従来の概念をこえたものがある。それを「観光」という用語を用いるかどうかは別として、現代の観光は大きな質的な変化をとげたのである。

その第1の点は、何よりも広い意味での観光需要や観光行動の圧倒的な増大であり、量の増大が遂に質的な変化を示すまでになったことである。観光は一部の特殊な人々の行動ではなくなった。国民全体のものとなり、国民全体の問題となった。それは衣食住に次ぎ、これと並ぶ問題となってきたのである。

第2は観光の範囲が極めて地理的に拡大されたことである。交通機関の発達で行動範囲を著しく広げた。航空機と新幹線の発達と、自動車道路の発達によって、これまで遠くにあった北海道、九州も東京から容易に訪れられるし、また歩いてしかゆけなかったような山岳にも道路やケーブルカーがつけられた。黒部立山アルペンルートなどはその代表的なもので、苦勞して足で歩いたことが夢のようである。そして所得の向上は、遂に外客を受け入れる「国際観光」ではなく、外国へ出かけてゆく「国際観光」までになっている。

第3には、内容的にも豊富になったことである。風景を見、温泉に入るというだけでなく、いわゆる「スル」行動を含んで多角化した。登山、ワンダリングはもちろん、スキー、スケート、ヨット、フ

イッシング、ゴルフ、からテニスまで遠くに出かけて行なわれている。

第4には、以上のような量的、内容的な観光需要の拡大の結果、観光地は日本三景に代表されるような限定的なものではなく、著しく拡大、拡散された。特別な自然や歴史が無くても、観光地や観光対象は創造されつづけてゆく。万博もそのように時限的に創造された対象だし、都市そのものも当然観光対象になってゆく。

第5には、観光とは単にどこかへ行く、何かを見る、あるいは「する」というだけではなく、訪れた地域全体との文化的接触になっている。文化的接触とは、文化財としての社寺や、博物館、美術館を見るだけではなく、その地域の風土、歴史、人々と接触することである。観光は、特定のビジネス目的を持たない文化的、人的接触といってよい。

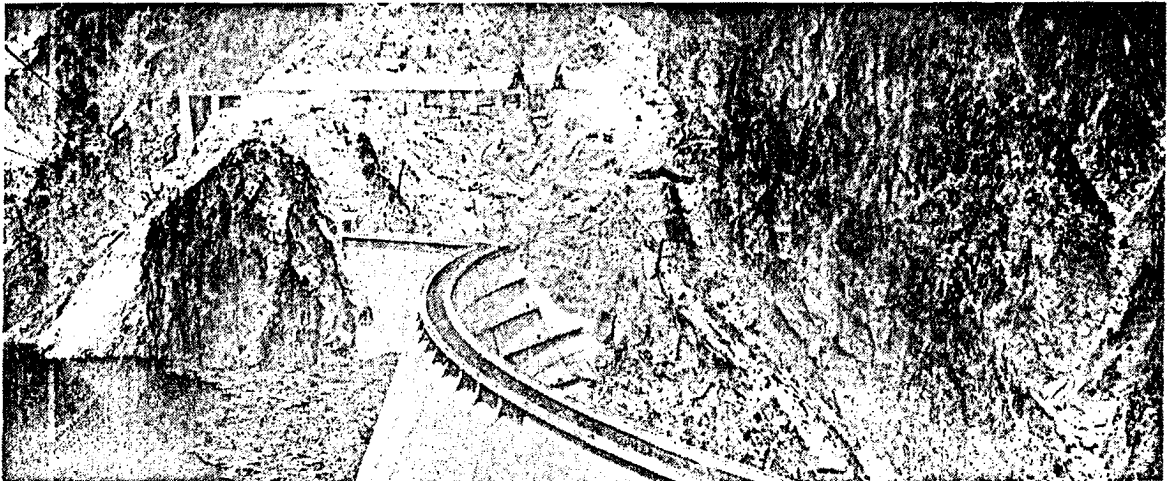
このように変化した観光状況は、観光というものを限定されたものから解き放って、広く国民生活全体の上に位置づけたのであるから、それが観光の重要性を増し、国民生活を単なる生活次元にとどめずより高い豊富な内容を与えてきたのはたしかである。しかし、その反面には、自然——人工、人工——人工、人——人、といった関係についての調和の技術が不十分だし、不馴れてあったため、さまざまな問題もひきおこすことになる。

#### 4. 観光国土づくり

##### 1) 心と創造の世界——地域開発の最終段階

観光の意義が拡大し、その重要性が増し、量的にも拡大されればされる一方において、観光地や、観光行動についての不協和音が高くなってくる。我々は改めて観光という面からの日本の国土づくりを考え直してみなければならない。本来、観光は物の生産とは違って、人々の意識や心情に直接うったえるものであり、作ればよい、安ければよいというものではない。人々の心に、安らぎ、気持よさ、たのしさ、おどろき、などを心に訴えかけて、そこに変化と満足を提供するものである。それだけに、これまでの生産偏重による機能性や効率性だけでなく、人間そのものの心情に直接訴えかける新しい国土づくりのモメントになりうるのである。この意味では、観光開発は、工業開発に取残された地域の代替的な開発ではなく、むしろ資源開発や工業開発を超えて、人間の場からする最終的な開発段階であるといえる。

人間はまず、生きのびてゆくための生存の段階を経て、生活の段階に入る。しかし、人間はさらに快適な、そして自ら生きていることを確認し価値づける創造的な世界をのぞむものである。ここにいう創造とは、物を創るだけではない。心の中に豊かな思いが湧き上ってくることも創造である。ある人々はそれを詩や小説に、あるいは絵や音楽に表現するだ



(黒部第四ダム)

ろう。しかし、そのような創作活動をしなくても、自然に触れ、町を歩き、人々に接するうちに、人の心の中に自ずと豊かな心が醸成されることが創造の世界である。

観光によって、人は衣食住という物の段階から、さらに人間のもつ本来的な心の世界へと積極的に展開し、何かを求め、何かをあこがれる人間らしい生活へ達しようとするのできるのである。

## 2) 非画一化、個性化

観光とは、生活の場と異なる場を訪ねて、そこで自然や、文化財や、町や、人にふれることによって、人の心の中に豊かな感情を湧かせる行為である。それなのに、どこへ行っても画一的になってしまつては観光の意味がない。明治以後は全国的に画一化することが近代化であると錯覚した。そして観光というもともと異なる地域性があるからこそ訪れる意味のある行為さえも、大量観光の時代には画一化されかけている。日本列島は南から北に長くつながり各地域の気候も、歴史も、地形も違い、そこに各地域の個性と文化と魅力が存在する筈である。そしてより个性的であろうとすれば、その地域づくりは、その地域の人々の創意と共同作業によることになる。町づくりもそうであるが、観光地づくりとは、特に地域の個性と魅力をひきだし創り上げてゆく行為である。そうした地域が地道な努力で続けられれば、日本列島全体は豊かな味わいのある土地となる。

この狭い日本の中で、観光が重要な役割を果たし、今後ともその需要が拡大されるとすれば、現在にみられる主要観光地の過密状態はますますひどい状態になるだろう。そうした特別の有名観光地にだけ集中するのではなく、个性的で味わいのある各地それぞれの魅力が過密状態を救うことになるだろう。

## 3) 味の濃い国土——意味のある中間地

狭い国土を実りある国民の観光の場とするためには、まだ必要なことがある。

「狭い日本、そんなに急いでどこへ行く」という標語がある。これはドライバーのスピード運転への警告だが、日本の現在の観光状況にもあてはまる。東京—京都514km、新幹線は3時間たらずで達する。たしかに京都観光には便利になった。しかし、その反面失われたものも多い。「ひかり」の列車の中の514kmは、車窓に景色は見えるが、窓はあかず、その地の空気が雰囲気も伝わってこない。これではテレビで景色を見ているのと変らない。通過した土地の臨場感がまるでないからである。そのうえ、通過する駅はどこも同じで画一的であり特徴がないし、各地の名物や弁当を買うこともできない。どこの駅とも分らず通過してしまう無意味な時間であり空間なのである。

かつての観光、そこでなされる旅は、庶民にとっては一生に一度か二度という大事件であったし、それのできない人も多かった。その代り、旅とは、ただ目的地にゆくだけのことではない。いや、各地で行なわれた伊勢講など、たしかに伊勢参宮を目的としていたはずだが、実のところは伊勢へ行くのは旅の名儀であり、たてまえであり、理由づけであった。伊勢へ行っても形式的に外宮でお札をもらって帰る者もあり、むしろその途中の道々が全部目的であったのである。

弥次喜多の東海道五十三次にしても、京へ上ることよりも、その途中のあらゆる失敗や体験が、貴重な人生経験であり、旅の楽しみであった。現在我々が行なう観光旅行は、点から点への旅行にすぎない。せつかくの中間の道はすべて、無意味にされている。これでは、何百キロ、何千キロの旅行も、途中の全部を目的としてさまざまな変化と人情とにふれあう観光の味の濃さという点からみれば、ただ一度の弥次喜多道中に遠くおよばないのである。狭い日本をいたずらに右往左往して意味のない移動距離をのばすだけでなく、じっくりと狭い国土を活用すべきで

ある。

#### 4) スピードより魅力の発掘を

飛行機でとべばサンフランシスコは10時間かからない。そしてゴールドゲイトブリッジを陸の内側からながめることができる。それは僅か20年前に2週間の航海でやっとたどりつきアメリカ本土への入口として見たゴールドゲイトブリッジとは、たとえ同じ橋であっても全く感慨も違う。今、私の見ている橋は何かが違う何かが失われているのである。

もちろん、歴史を昔に戻すこともないし、外国旅行に航空機は必要であろう。しかし、それと同じことをこの狭い国内でも行なっている。そして便利になることで、実は豊富に人の心を感動させた何かを失ってしまったのではないだろうか。いそぐだけなら観光ではなくビジネスである。しかし、いそぐことなら、新幹線も航空機にかなわないし、航空機も、電話という通信手段とは永久に勝負できない。ビジネスなら、そのうちには電話を始め、通信手段によってその90%はカバーできるはずである。とするならば輸送手段は、ビジネスよりも、むしろ広い意味の観光に大きな比重がかかるはずである。

観光は、特別な場合でなければ、目的地のほかそのプロセス全部に意味がある。そして意味を失なわされた小さな魅力を掘りおこせば、日本の国内はまだまだ観光過密になることはない。

国鉄で東京からのスピード競走をしている時代はすぎた。見おとされた日本を発見するディスカバージャパンを言っているならば、幹線ぞいの数々の魅力を消したことを反省すべきだろう。スピード競走は航空機と通信にまかせればよい。鉄道も道路も、新しい魅力を探りあて、個性的な魅力ある地域を美しい首飾のようにつなぐ役割をしてゆくべきだろう。アメリカ大陸のように単調な国で離れた点と点をむすぶだけでなく、変化と個性が日本列島の風土の特徴だからである。

#### 5) 観光客の参加

新しい日本の観光のためには、個性ある観光地づくりと、地域の個性と魅力をひきだす交通手段だけではなく、さらに観光を行なう人々のことを問題にしなければならない。大衆観光の時代に、観光客は観光資本のたんなる客体にされてしまった感がある。

しかし、実は観光は観光を行なう人々に主体がある。その人々が生活を、衣食住だけでなくより充実し、心を豊かにしたいときに観光は必要となる。それならば、観光資本の責任も重いし、観光地の市民も重要な役割をもつが、それだけでなく観光を行なう人々も、実は、観光の内容を作っている。観光を行なう人々の行動が、実は観光地をすばらしくも、また悪化させてしまう重要な要素である。観光地のゴミの問題、マナーの問題もその現れである。

現代では観光客とは、何も特定の人々ではなく実は、現代では国民全体なのである。国民は市民として自分の身のまわり、自分たちの生活を作ってゆく場に自覚と責任をもって当ってゆくことが必要だし、そうすれば、魅力ある地域を創り上げることができるとはならない。それと同じように、今や国民全体である観光客は、それぞれの訪れる観光地で、居住者としてではないが、いわば臨時的観光市民として観光地づくりに参加すべきなのである。

我々が観光の内容を豊富にし、それを十分に楽しみ、充実するためには、観光地づくりへの自覚と責任と権利をもって参加することは、観光地の人々や心とも親しみあうものだし、観光地を、そして観光資本を、さらには国土全体を魅力あるものとして創り上げてゆく原動力となるのである。

さらにつけ加えて言うならば、膨大な海外へ訪れる観光客も、たんなる遊興、買物ではなく、今後どうしても日本にとって必要な国際関係をよりよきものにしてゆくための日本の国際的な人間関係づくりに参加しているとの自覚を持つべきなのである。